

富 山 巡 検

鈴 木 英 美 子

7月10日から7月13日までの4日間、式先生、助手の新井先生のご指導のもと、私達21人は富山県へ巡検に行った。梅雨があけていなかったためにはっきりしない天気が続いたが、正規の2泊3日の巡検に1日巡検を加えた3泊4日のバスの旅は、訪問する場所も多く、毎日のように地元の方々のご指導を受け、内容の濃いものとなった。

初日、列車の到着時刻に合わせて北陸本線入善駅に12時30分に集合した。この日のフィールドは県東部の臨海扇状地、黒部川扇状地である。

扇端部では縄文時代の遺跡であるじょうべのま遺跡、海岸侵食に悩む吉原集落と防潮堤、湧水によって繁茂する杉沢の杉、現在キャンプ地となっている関家山砂丘を見学し、臨海扇状地特有の地形に関するお話をうかがった。臨海扇状地は山麓が直接海に接する所で、河川の堆積力と沿岸流の運搬力が適当につり合った時に形成される。しかし上流部の開発や洪水防止事業が進み河川の運搬物が減少したために、最近では海岸侵食が進んでいる。そのために海岸線には防潮堤、離岸堤が築かれ、テトラポットや六角ブロックがおかれて侵食から海岸を守っていた。

その後黒部川に沿って扇央に向かった。途中の扇状地上では散村形態がとられている。散村といえば砺波平野のものが有名であるが、ここにも濃緑のカイニョウ（屋敷森）を南西側に構えた農家が、青々とした水田のあちらこちらに散ばっていた。

新旧の扇状地を限る崖の高度差を利用した水力発電所をバスの窓外に見つつ、扇央の愛本に到着した。ここには流水客土の合口事業のために沈砂池がある。崖の上から扇状地全体を眺めると、赤いアーチの愛本橋から青い水田、その中を流れる、網状の形態がはっきりとわかる黒部川を見ることができた。

2日目は県中央部の富山平野を見学した。富山

市では市役所で市街地の成り立ちと構造、富山駅前再開発についての説明を受け、さらに民俗民芸村の売薬資料館、富山大学の藤井昭二先生の扇状地上の微地形についてのお話、そして富山空港と神通川、また、八尾町では中核工業団地とその中の国際電気の工場、聞名寺とその周辺のしっとりとした町なみを見学した。水田の広がる伝統的な生活の姿と、新しく開発されていく地域としての姿は対照的ではあったが、この二つはうまく調和し共存しているのだと思った。

3日目は散村とチューリップで有名な砺波平野を見学した。富山県花卉球根農業協同組合と栽培農家のお話によると、砺波平野は冬の降水量が多く砂質土壌地でチューリップには最適であり、裏作で栽培しているそうだ。7月には緑だった水田は数か月前は花ざかりだったのだ。この組合は球根を海外に輸出しているが、昨今の円高で厳しい競争をしいられたため、品種改良に力を入れて国内需要を増やす努力もしている。

次に福光町の三協アルミ工場を見学した。機械化による農家の余剰労働力、特に女性を雇用している。このようなタイプの工場は県内にいくつもできていて、農村の田園化を実感させられ、農村は都市の延長上にあるものになったと思った。この日はさらに、木彫の町井波町の瑞泉寺も訪ねた。

最終日は山村五箇山である。平村役場では、過疎対策として若者の定住・Uターンへの助成、観光業に力を入れて人を集める、といった説明を受けた。国道が開通し富山市まで1時間程となった今では両者とも効果がでてきているという。しかし山村センター・山菜加工所を訪れ、紙すきや相倉の合掌造りなどの伝統文化を見ると、過疎対策は必要なこととわかっていても、開発のために少しずつでも伝統が失われていくのは寂しいような気がした。

（7月10日～14日 式教官指導）